

## 特別セミナー 「アジアにおけるジェンダー研究の最前線」

ソヴィエト朝鮮語新聞における可視的／不可視の高麗人女性像

ゲルマン・キム (German Kim)

私は 30 年ほど前から高麗人 (コリョ・サラム) の歴史と文化を研究してきた。自らも高麗人 3 世としてソヴィエト連邦で生まれ、ソヴィエト連邦で育った。このエッセイでは、高麗人女性の可視的な (そして不可視的な) イメージに焦点を当てる。

朝鮮語新聞『先鋒(선봉)』(「前衛」の意味) は、1926 年ロシア極東で創刊された。1937 年にスターリン政権下で高麗人がカザフスタンとウズベキスタンに追放されると、新聞は『レーニンキチ (레닌키치)』(レーニンの道) と改称されたが、ソ連崩壊後には再び改称された。現在、この新聞は「朝鮮人の日刊紙」を意味する『高麗日報 (고려일보)』という名称であるが、日刊ではなく週刊である。数年前、筆者はあらゆる韓国・朝鮮語新聞をデジタル化するプロジェクトを開始した。このプロジェクトから得た画像は膨大な資料であり、このエッセイの基礎をなしている。

まず始めに、女性たちはある瞬間に突然、高麗人になったわけではない。朝鮮半島に何世紀にもわたり暮らしていた彼女らは、19 世紀後半に極東ロシアに移住し、沿岸地域に定住して朝鮮族の村を形成した。その村での生活は、家も食べ物もルールも社会も、そして女性の地位や立場も、すべて朝鮮と同様だった。ロシアの地にありながら、その村々は長い間朝鮮の村そっくりだった。女性の役割や地位も含めて、朝鮮の古い伝統的な社会生活が営まれていた。

伝統的な朝鮮は儒教社会であり、女性には権利も自由も名前もなかった。女兒が生まれると、その子は「誰かの娘」であり、名前はなかった。結婚すれば「誰かの妻」。子供を産むとその子の母親に、年老いたら、孫のおばあちゃんになった。夫のため、子供のため、家のために自分を犠牲にすることが期待されたのである。



(写真キャプション)

左上の写真に写っている女性はアラブの国にいるかのようにだが、これは20世紀初頭の朝鮮である。この女性は顔をわずかしか見せておらず、朝鮮の伝統衣装を着ている。これと同様の写真に写っているのは「一般の」女性ではなく、キセン（妓生、朝鮮の芸妓）である。

右上の写真はウラジヴォストクの朝鮮人の村を描出したものである。世界初の朝鮮人街は、アメリカなどではなく、ウラジヴォストクに設立されたシンハンチョン（신한촌、新韓村）であった。20世紀初頭、年配の男性たちは朝鮮の伝統的な民族衣装を着ているが、一部の男性はヨーロッパあるいはロシア風の服を着ている。だれがスパイか、だれがスパイでないかを見ている警官も描かれている。

『先鋒』に掲載された女性の写真は、概して飢えた非常に貧しい人々、ロシアの底辺の人々のステレオタイプなイメージである。確かにこれはほとんどの人の状況を表してはいたが、中には裕福な人々もいた。例えば、ウラジヴォストク中央駅では、非常に裕福で高学歴の若い高麗人女性の姿が認められる。

ソヴィエト革命がサンクトペテルブルクからロシア全土に波及すると、当然極東にもそれは到来した。極東ロシアの高麗人の多くは、土地を持たない貧しい農民であったため、レーニンの「すべての人に自由を」「戦争中止」という思想を信じていた。そのため、高麗人ゲリラやパルチザンの写真が掲載されている本もあった。しかし、ソ連では、高麗人について書かれた本はほとんどなく、それどころか、スターリンは高麗人を信用できない人間だと疑い、彼らについて書くことを禁じていた。その顕著な例外として、1920年から1980年の間にソ連で出版された、ボリシェヴィキの戦士である高麗人についての数冊の本『革命は極東 (Revolution is the Far East)』がある。



写真キャプション: 代表的なソ連の高麗人女性共産党員に関する書籍『アレクサンドラ・ペトロヴナ・キム=スタンケヴィッチ (Aleksandra Petrovna Kim-Stankevich)』。全高麗人同盟発行による「ロシアの朝鮮人」シリーズ。

ロシア極東における民族解放運動の指導者たち、その中でもロシア極東共和国に赴き各国の干渉と闘ったゲリラ指導者たちに関する本の中で、女性を描いたものはたった 1 冊しかない。アレクサンドラ・ペトロヴナ・キムは、ソヴィエト革命期の政治活動家で、初の高麗人共産主義者と言われている。革命後、彼女は指導的立場に就いて、ボリシェヴィキ党の極東部門で渉外を担当するまでになった。1918 年 9 月、彼女は反革命派と日本軍に捕らえられ、処刑された。現在、彼女はロシアで英雄として認められている。大韓民国は彼女の埋葬地にプレートを建立し、それはロシア政府によって保護されている。これは非常に新しい傾向だといえる。というのも、10 年ほど前まで韓国政府はこのような民族革命運動の指導者を認めず、単に「赤い共産主義者」と呼んでいたが、今では朝鮮人の自由のために闘ったことを認めているからだ。



(写真キャプション)

第一次ソヴィエト憲法発布を記念するポスター（1931年）。

第一次ソヴィエト憲法では、男女平等が謳われていた。もちろん、これはすでにレーニンの著作で主張されていたことだった。革命後、ソ連は「ソヴィエト東方の女性の解放」というスローガンを掲げた。「ソヴィエト東方」とは、主に中央アジアとカザフスタンのことを指す。また、1930年代には「ソヴィエト女性の平等に万歳」という別のスローガンが流行した。「母親でありながら（外で）働いている女性」というワーキングマザーの概念が広まった。ソ連の平等の概念は、女性は母親であるべきであり、母親は働くべきであるということの意味していた。その代わりに、子供の世話をする義務は政府が引き受け、幼稚園や学校などを設立するのである。このようにして、女性は平等な社会的権利を持つと同時に、社会的義務も負うことになった。

スターリンによって実現された、レーニンによるソヴィエト社会主義共和国設立の計画には「社会主義の勝利のための3つの課題」の実現が含まれていた。第1の課題は工業化、第2の課題は集団化、第3の課題は文化革命であった。ソヴィエト化以前のロシア・ソ連は、ほぼ完全な農耕社会であった。工業化のための大規模なキャンペーンは、大祖国戦争（つまり第2次世界大戦）以前、1929年から1941年にかけて実現された。工業化と集産化の過程で、ソヴィエト政府はよい結果を出した労働者を大規模に、つまり一斉に表彰する制度を考案した。受賞者には「勲章」やメダルが授与された。最高は金メダルで、最高の称号は「社会主義労働英雄」であった。この称号を得た20,747人のうち、高麗人は206人だった。こ

の称号を二度も受けたのは、高麗人の金正和（キム・ペンファ）1人のみである。人口比に対して高麗人の受賞数が多いのは、特に農業で優れた成果を上げたからである。

ソ連時代、ウズベキスタンやカザフスタンにはコルホーズと呼ばれる有名な集団農場が多く存在し、綿花、米、砂糖、甜菜、穀物などが栽培されていた。工業化の過程において、ソ連の女性の役割は不可視だった。ソヴィエト時代のポスターには女性はおらず、男性しかいなかった。それを覆したのが1937年にソヴィエトの有名な女性彫刻家ヴェーラ・ムーヒナ（Vera Mukhina）が制作し、世界的に有名になった「労働者とコルホーズの女性」像である。高さ20メートルを超えるこの像は、パリでの万国博覧会のために制作され、その後モスクワに移された。この像は現在でも国民経済達成博覧会（ヴェー・デー・エヌ・ハー）の近くに置かれている。この像は女性を包摂した工業化と集団化の統一を表現するものだ。

集団化に関するポスターを見ると、確かに女性の姿が多い。これは農業において女性の役割が重要だったからである。しかし、社会主義労働英雄たちの写真を見ると、男性ばかりで女性はいないのである。高麗人の社会主義労働英雄206人のうち、女性はわずか40人。これは、ソヴィエト連邦やウズベキスタン、カザフスタンなどの中央アジア共和国に蔓延していた不平等を反映したもので、男性がナンバーワン、男性がボスだった。女性は農業労働者全体の60%を占めていたにもかかわらず、高麗人の全労働英雄の0.067%しか占めていなかった。この不可視性は高麗人だけではなく、すべての女性がそうだったのである。

しかし、目立って非常に有名になった高麗人女性もいる。例えば、社会主義労働英雄だったリュボフ・リー（Lyubov Lee）。彼女が働いていた集団農場をニキータ・フルシチョフ（Nikita Krushchev）が訪れた際、写真撮影の際たまたま彼女はフルシチョフの隣になった。この写真はソ連中の新聞や雑誌に掲載され、彼女は一躍有名になった。やがて、ソ連の有名な政治家、著名人、外国からの賓客、アフリカやアジアの国々の指導者たちが本物の社会主義集団農場の「真髄を知る」ためとあって、こぞってリーを訪ねるようになった。リーはその後、ソ連最高議会議員という非常に高い地位に就いて、2期8年を務めた。

写真がきっかけで有名になったもう一人の女性に、エカテリーナ・キム（Ekaterina Kim）がいる。国民経済達成博覧会でウズベクスタンのチュベチエイカ（伝統的なウズベク帽）をかぶった彼女の象徴的な画像が非常に人気のあった雑誌に掲載され、彼女はソ連全土で有名になった。彼女は2019年7月、ソ連最後のヒロインとして亡くなった。このように目に見える女性労働者の写真は他にもたくさんある。彼女たちは畑を耕し、農場で働き、鶏を育てたのである。



写真キャプション：ウズベキスタンのチュベチェイカを着用したエカテリーナ・キムの象徴的写真

農業分野で目に見えない高麗人女性といえば、コボンジル（股本行為）に従事していた女性たちだ<sup>1</sup>。コボンジルとは、高麗人が考案した極めて特殊な半合法的農業行為であり、労働者のチームがもともと住んでいる場所からウクライナのような土壌の良い地域に移動し、土地を借りて主に玉ねぎなどの作物を栽培し、収穫物の一部で賃料を支払うというものである。コボンジルはソ連におけるいわゆる「民族的起業」の始まりであった。すなわち、起業家として民族的ネットワークを利用したビジネスを行うという手法である<sup>2</sup>。1960年代から1990年代にかけて、コボンジルは高麗人が現金を稼ぐよい機会になった。時には大金を稼いで裕福になり、子供らに中央アジアではなく、モスクワやレニングラードで良い教育を受けさせた人もいた。半合法的に行われていたが、ソ連政府はこの行為には目をつぶり、高麗人がごく少数のグループであることを理由にこれを許可していた。1960年から1980年代にかけて、コボンジル農家はソ連全土の市場に出回るタマネギの70%を生産していた。ソ連の各地から6,000kmもの距離を輸送する必要はなかった。高麗人たちは15~20人の小集団を形成し、ソ連国内の様々な地域で生産を行っていたからだ。最盛期には、家族や親戚、近所の人や友人、工場の同僚までもが総出で作業を手伝ったので、高麗人のほとんどが、コボンジルが何かを知っていた。コボンジルは女性を抜きにしては語れない。なぜなら、コボンジルで最も大変な仕事をしたのは女性だからだ。

コボンジルはもちろん、家事労働も、高麗人女性だけでなくすべての女性においてそうであるように、目に見えない。家事をしている女性の写真は、新聞には載っていない。筆者や学生が作成した写真アーカイブにはいくつかあるものの、全体として写真は発表されないことから、家事労働は不可視なのだ。

<sup>1</sup> Kobon（股本）は一筆の土地、ji（行為）はある種の仕事を指す。

<sup>2</sup> Kim, German. 2009. *Ethnic entrepreneurship of Koreans in the USSR and post-Soviet Central Asia*. Chiba: Institute of Developing Economies. を参照。

写真キャプション: 子供を背負ってウズベキスタンのコボンジル農場で働く高麗人の母親(1970年)



ソ連では、母性と出産は自然な義務と考えられ、尊敬、推進、表彰の対象であった。きわめて大きな尊敬の対象だった最高位の勲章は、10人以上の子供を育てた母親に与えられた「母親英雄」であった。二番目は3つの階級に分かれる母性名誉勲章で、さらに金と銀の2つの階級に分かれた母性勲章があった。ソ連政府が大家族を支援していたにもかかわらず、集団農場で暮らす高麗女性の多くは、こうした賞に応募するための必要書類を作成しなければならないことも、その方法さえも知らなかったのである。1940年代から1950年代にはカザフスタンの高麗人家庭の多くは集団農場や村に住み、5人以上の子供がいた。特に大家族の場合は7人以上の子供がいた。1960年代、人々は村や集団農場から町や都市に移り住むようになり、高麗人の急激な都市化が始まった。高麗人家族の規模は急速に縮小し、1970年代には平均的な高麗人家族の子供の数は2~3人になった。

(写真キャプション)



新聞に掲載されなかったユニークな写真として、11 人の子供を産んだにもかかわらず、母性名誉勲章を受けなかった母親（理由は不明）のものがある。上の写真に写っているキム・ディア・ボク（Kim Dya Bok）は10人の子供を産んだ。彼女は10人以上の大家族を産み育てたことで、ソヴィエト連邦最高の称号である母親英雄勲章を授与された。朝鮮語新聞が、ソ連の母性勲章を授与された高麗人女性の記事や写真を掲載しなかったのは恥ずべきことだ。筆者はその理由を説明できない。

では、目に見える高麗人女性とはだれであろうか？ ソ連人、高麗人に限らず言えることだが、一般的に目につく女性は、女優やスポーツ選手などの有名人である。カザフスタンの朝鮮劇場では非常に有名な女優が活躍しており、その中にはソ連の名誉女優という高位の称号や、ソヴィエト連邦あるいは共和国の人民芸術家の称号を与えられた者もいた。

(写真キャプション)



上の写真に写っているリ・ハム・デク（Lee Ham Dek）は、カザフスタン共和国の人民芸術家である。下の写真は朝鮮語新聞で有名になったもので、リ・ハム・デク（中央）が、どちらもカザフスタン共和国の名誉芸術家であるツオイ・タチアナ（Tsoy Tatyana）（左）、パク・マヤ（Pak Maya）（右）と一緒に写っている。この3人は、朝鮮の古典小説『春香伝（Chunhyangjeon）』の若い主人公、春香（チュンヒャン）を演じた。この小説は舞台化され、カザフスタンの朝鮮劇場においていくつかのバージョンで上演された。この劇場の男性演出家は、ソヴィエト連邦の人民芸術家に選ばれた。





ソ連では、偉大な人物がその出身民族の文脈では語られないことがあった。これは現代でも同様である。最近、Google で高麗人の有名人を検索してみると、ロック歌手ヴィクトル・ツォイ (Victor Tsoy) が500 万以上のヒット数で1 位になっている。それに比べて、世界的に有名な作家アニータ・ツォイ (Anita Tsoy) (写真左下) は100 万ヒットに過ぎず、オリンピックで5 回メダリストになったネリー・キム (Nelly Kim) (写真右下) は170 万ヒットである。



可視化されてきた高麗人女性とはどんな人たちだろうか？ 集団農場の女性たちは何人かいるが、レーニン勲章を2つと英雄金メダルを獲得した女性でさえ、可視化されないままだ。高麗人の学校教師や仕立て屋、医師などの表象はある。また高麗人は会計業務が得意であったため、簿記係、売り子、商人などの写真も見られる。

しかし、高麗人のバーブシュカ（おばあちゃん）の姿は見られない。バーブシュカは、ソ連の文化、生活、生活様式、そしてソ連人のメンタリティの一部である。バーブシュカとは、ただ単に「おばあさん」ではなく、文化にとって特別なものなのだが、『先鋒』新聞には高麗人バーブシュカの写真は1枚も掲載されていない。この写真は60歳記念に出版する本の表紙用に撮影したものである。高麗人バーブシュカもいることを示したかったからだ。



ソ連の政策は、高麗人女性の社会的、文化的地位を、昔の朝鮮や革命期のロシア、あるいは1990年代末と比較しても、大きく変貌させた。ポスト・ソヴィエト空間における高麗人女性に関するジェンダー研究は、まだタブラ・ラサ、つまり白紙の状態である。どんな研究があっても、マスメディアからは関心が寄せられない。高麗人女性とソ連の歴史は、ソ連社会における女性の地位など、ソ連における女性問題の一般的な発展の多くの側面で交差しているが、家庭や社会における高麗人女性の可視層と不可視層には特有の問題がある。

高麗人女性を含むソ連人女性のイデオロギー的、ステレオタイプ的な肖像は、多くの点で真実からかけ離れている。したがって、高麗人女性に関するジェンダー研究は、彼女らをソヴィエト人としてあるいは高麗人としてのみ見ることに留まらず、新聞紙上に表現されたイメージだけでなく、アーカイブ、文献、オーラルヒストリー、インタビュー、フォークロアなど、幅広いソースに基づいて行われねばならない。